

よりよい明日を、世界の人々と。

# JICAとうほく

Japan International Cooperation Agency

jica  
ジャイカ

夏号

No.25 季刊

2006.7.1  
JICA東北



—「90年の“アジアモンスーン稻作農民炉ばたまつり”開催のきっかけを教えてください。

その頃、米の自由化が社会的に問題になった時期で、角田市でも道路に「米の自由化反対！」の看板が掲げられていました。内向きの議論が盛んに話し合われていましたが、米の将来を考えた時に、否が応でも外国と関わらなくてはいけない。視点を変えて他国で米作りをしている方々と交流を持ちながら、稻作の将来を考えてみようと企画したイベントでした。自分たちだけの考えではなく、同じ米作りをしている他国の方の考え方を聞いてみたいと思うようになったわけです。その頃のタイの農村でも地元NGOが農村の自立に向けて運動をしていたのですが、お互いに話し合う機会を持つイベントもありました。

—そこでは、どのようなお話をされましたか？

日本の百姓は米の自由化で生活が大変だと話したところ、彼らから「こんなに食物があつて、車があつて、何が大変なのだ。あなたたちは本当の貧しさを知らない。現実を見せるから自分たちの国に来てほしい」と言われ、実際にに行って、見て大変衝撃を受けました。その事がきっかけで今の活動があるのだと思います。

—イベントで来日したアジア5ヶ国の農民の中の、タイ・イサーン地方の農村リーダーと知り合うわけですが、その後、何故「足踏みミシン」を贈ることになったのでしょうか？

村では先進国の技術を取り入れ、森を伐採し畑を作り、どんどん近代化を進めっていました。しかし、一時的に収入は増えたもののたちまち土壤が悪化し、肥料代などの借金だけが増えました。彼らはどのような暮らしが良いのか考え直

## 米作りとミシンで 世界とつながる

宮城県角田市発

仙台市から南へ40キロ、宮城県角田市は東に阿武隈川流域に広がり、西に蔵王連邦が連なる肥沃な土地で、県下でも有数の米どころとして知られています。

1990年1月、角田市では農協青年部主催により、アジア5ヶ国の農民を囲み、アジアの農民の自立と共生をテーマに「アジアモンスーン稻作農民炉ばたまつり」を開催しました。このシンポジウムがきっかけとなり、青年部OBを中心に国際協力の自主運営組織として「角田市アジアの農民と手をつなぐ会」が設立。発展途上国への村おこしや技術協力事業等を継続的に行うほか、世界からの農業研修生の実習の受け入れや、研修生の学校訪問プログラムを展開するなど、地域に根ざした活動を実施しています。

今年1月にはタイのイサーン地方タラート村へ8年前に寄贈した「足踏みミシン」の活用状況を検証するなどの活動を行っています。

今回は、代表である面川義明さんと、会員であり「NPO法人エコショップかくだ」理事長の古積恭子さんに、市民が参加する国際協力について伺いました。



プロフィール

おもかわ よしあき  
面川 義明

宮城県角田市在住。米づくりを始めて30年。

「角田市アジアの農民と手をつなぐ会」代表。

おいしいお米に仕上げるために田んぼに通い続けるかたわら、1999年より2005年まで35ヶ国76名のJICA農業研修員の受け入れや、開発途上国への農業指導者派遣事業などに携わる。

毎月第一月曜日に『ラジオ』深夜便（NHKラジオ第1放送）に出演。また、ホームページ「角田発 田んぼ通信 <http://www.omokawa.com/>」を更新するなど幅広い活動を行っている。

すようになり、昔からの伝統技能の復活、伝統的な生活の見直しを永続的に続けていきたいと、考えるようになっていました。さらに、村のお母さんたちが元気にならないと、村の全体の活性化に繋がらない。そこで、昔ながらの女性の仕事であった草木染の機織りに、付加価値をつけるためミシンを使って売れる製品にし現金収入を得る為、現地でミシンを購入しましたが、日本の製品の方がはるかにいい。足踏みミシンだと電気が無くても使えます。

(古積さん)：同じ時期角田女子高等学校（現：角田高等学校）・伊具高等学校では長年使っていたミシンを廃棄しようしていました。何とか捨てずに活用できました。

いかと考えていましたところ、タイでは、このミシンが貴重な現金収入の道を拓くということを知りました。そこで、このミシンをタイの女性達のために役立ててもらおうと、生徒会が中心となり、文化祭で募金をお願いしました。卒業生や町の人達からのカンパもあり、合わせて42台のミシンを送ることができました。

—今年1月にミシンを贈った村を訪ねていますが、どのように利用していましたか？

(古積さん)「贈ったミシンがどのように使われているのか、自分の目でみたい」

次ページへ続く→

そんな思いから村を訪れました。以前は都会へ出稼ぎに出てエイズに感染する子や、家を離れて近隣の畑にお母さんが出稼ぎに出て家計を支える家庭もありましたが、ミシンが来たことによって家で子供の面倒を見ながら、村で生活できるようになっていました。また、周りの若い女性たちが出稼ぎに行かなくても、村で生活できる事に気づきはじめていました。

(面川さん) また地元 NGO も徐々に「村の人たちの自発性を押して、自分たちの最終目的は自分たちの活動が無くなることだ」「我々が必要ない社会になればいい」と考えるようになっていました。

—毎年様々な活動をされてますが、これからの活動をお聞かせ下さい。

お互いが競争をしないで、互いの生活圏の中で自給し、余った分を融通しあう、一つのアジアの中で生きていく地域にしたい。その目標に向かうにはまず、こういった活動を地道に続け広めていくことが大事だと思います。今も環境問題で従来の焼畑農業が困難になってきた、タイの山岳民族の定住を支援する為に、必

要な農業教育を支援していますが、今後はそこで関わりのあるミャンマーへの支援を考えています。まずは食物を自給できないと続きません。やはり過去の戦争の事を考えると日本人として黙ってはいられません。

—最後に JICA への提言をお聞かせください。

自分たちだけで、途上国の人々を一人日本へ呼び寄せるには大きな障害があります。JICA は政府との交渉をするなど JICA の役割、主催者の役割があると思います。大きなプロジェクトだけでなく、小さなプロジェクト（生活レベル）で、市民がもっと活用できるよう充実したシステムを構築してほしいです。また、研究者だけでなく現場で働いている農業者の意見、技術をもう少し取り入れてはどうかと思います。

—貴重なご意見ありがとうございました。

ミシンがもたらしたのは重労働・低賃金の出稼ぎからの解放。「支援」から「協力・

連帯」を目指し、「角田市アジアの農民と手をつなぐ会」はこれからも、さまざまな活動を展開されていかれることでしょう。タイの女性の自立を誇らしく語っていた古積さんの目、「あくまで農業が仕事だが、自分たちの出来る範囲で相手が望む支援を続け世界と繋がる。頑張らずに続けられることをする」とおっしゃっていた面川さんの言葉が印象的でした。今日はありがとうございました。

(記：田中太朗)



古積恭子さんとタラート村に贈ったミシン

#### コラム：「角田市アジアの農民と手をつなぐ会」と JICA のつながり

- ▶ 2000 年に筑波国際センターの JICA 研修員 10 名の農家実習を角田市で受け入れたことに始まる。以来、稻作や野菜栽培の研修で来日する研修員を毎年受け入れ、2005 年まで 35ヶ国 76 名の研修員が角田市で農家実習を行っている。実習の際には、研修員には受入農家へのホームステイのほか、地元の小学校訪問もプログラムに組み込むなど、地域住民を巻き込んだ研修を行っている。
- ▶ 同 2000 年には、ミシンを寄贈した縫製工場を指導・運営している女性 1 名が JICA 研修員として来日し、角田市で 1 ヶ月間縫製やデザインの勉強をしました。
- ▶ 2006 年 1 月には、市民参加協力プログラムを活用し、「手をつなぐ会」と角田女子高校の卒業生がタイを訪問し、市民が寄贈した足踏みミシンの活用状況を視察するとともに交流を深めた。

## 市民参加協力プログラムとは？

「市民参加協力事業」は、JICA が 2003 年 10 月に独立行政法人化した際、市民の方々による国際協力活動への理解と参加の促進を目的とし、新しい JICA の主要業務として法律に定められた事業です。主な事業は次の 4 つです。

### 市民参加協力事業

- 草の根技術協力事業 NGO や自治体、大学等がこれまで培ってきた経験や技術を活かして企画、提案した途上国への協力活動を共同で実施する事業
- 開発教育支援事業 小・中・高生に国際協力や途上国を理解してもらうための出前講座及び教員の方向けのセミナー、教師海外研修などの事業
- 青年招へい事業 将来の国づくりを担う途上国の青年を短期間招へいし、日本人との幅広い交流を通じて相互理解を深める事業
- 市民参加協力プログラム 地域の国際協力活動団体や NGO と連携し、一般市民や大学生を主なターゲットとして行なう国際協力の理解促進のためのイベント・セミナー等の事業

「市民参加協力事業」と名称が似ていますが、「市民参加協力プログラム」は、一般市民の方が、国際協力のことを知り、さらに踏み込んで国際協力に参加して頂くきっかけを提供するため、各県の JICA 国際協力推進員が中心となり、種々の団体と連携して様々なイベントや企画を行っているものです。

### 17 年度に実施した主な「市民参加協力プログラム」(東北 5 県)

開催県	事業名	共催・協力団体	概要
青森県	地球市民講座	青森県立保健大学	青森・沖縄・パラオを題材とした国際理解ワークショップ
岩手県	いわて地球市民フォーラム	岩手県協力隊を育てる会・岩手大学他	岩手にゆかりのある国際協力をテーマとしたシンポジウム
秋田県	フェアトレード・フェア	フェアトレードフェア実行委員会	「フェアトレード」をテーマとした国際理解イベント
宮城県	みやぎ国際協力のつどい in おおさき	古川教育事務所、(財)宮城県国際協力協会	宮城県北地域の国際協力活動の情報共有・普及を目的としたイベント
山形県	長倉洋海講演会 & ワークショップ	出羽庄内国際交流財団、(財)山形県国際交流協会他	紛争地の写真家・長倉洋海氏のトークを主とした国際理解セミナー

冒頭のインタビューで紹介した「角田市アジア農民と手をつなぐ会」がタイのイサーン地方に贈った「足踏みミシン」の活用状況を現地調査し、地元でその成果を報告したのも、このプログラムの一環で行いました。

## 国際協力の フロンティア から

東北から派遣されているシニア海外ボランティアから届いた現地活動報告です。

# 青年海外協力隊

私の派遣先はインドネシアのバリ島・ヌサドゥアにある観光大学の調理科です。(協力隊が派遣されてから今年で7年目)。そこで日本食の先生をしています。

管轄のインドネシア文化観光省が協力隊を要請した理由は、観光地バリ島は年々日本食レストランが増えているが、今ひとつレベルが上がらないこと。日本食の味のレベルが上がり、リピーターが増えると見込んで料理隊員を要請したようです。

現在バリ島訪問の旅行者統計の第2位が日本です(第1位はオーストラリア)。年々日本食レストランがバリ島内に増え続けていますが、日本人観光客が満足する日本食レストランは、実際数えるしかないです。

私の活動は、この学校の先生方と生徒達に日本食の特徴と歴史を教え、調理実習することです。ここインドネシアの料理は揚げ物が多く、香辛料を利かせた甘い料理が特徴的で、根本的に味覚の感じ方が日本の味とは違うようです。

私がインドネシアに来て、初めて味噌汁を飲んでもらった際は、皆が首を横に傾げてトイレへ走っていましたことがあります。



観光大学の学生たち&料理の写真

インドネシア派遣・職種 料理  
村上 慶人



### むらかみしげと

1976年4月10日。青森県黒石市生まれ。フランス料理の世界で7年経験を積む。一時期実家に戻り、家業に従事したが、もっと勉強したいので仙台のロイヤルパークホテルでコックとして働いた。協力隊に参加したきっかけは、姉がチリの首都サンチャゴへ協力隊(料理)で行ったこと。実家の父は、黒石市で和食創作料理「レストランみゆき」を営んでいる。協力隊に参加する時「インドネシアに2号店でも出して来い！！」と激励の言葉があった。

### プロフィール

の時は、インドネシアの人に和食の味を教えるのは非常に困難と思えました。以降、そのことを考えないようにしていましたが、活動期間も1年半が過ぎ、私の学校の先生は、ご飯、味噌汁、だしなどの基本から、刺身、寿司、煮物などの中級程度の物まで作り、更にそれを生徒に指導できるまで成長しています。

今は毎回新しい日本料理を紹介して、Enak!「美味しい!」と言ってもらえるのが最高に嬉しいです。任期は残り少ないですが、生徒や先生達に出来るだけ多くの日本食の文化を指導していきたいと思っています。遠くない将来、行列ができる日本食レストランで、自分の生徒達が腕を振るっている姿を夢見て。

任期中にスマトラ沖の大津波、バリ島自爆テロ事件、ジャワ島中部ジョグジャカルタの大地震と立て続けに不幸がありましたが、インドネシアはそれでもくじけず皆で助け合い頑張っています。私も同じ国に住む人間として、精一杯支援をしていきたいと思います。一刻も早い復興を願い、犠牲者のご冥福をお祈りします。



海外から東北へ来た JICA 研修員を紹介します <http://www.jica.go.jp/activities/ukeire/>

## 産業技術総合研究所（産総研）東北センター セルダ・ムラットさん



### プロフィール

#### Selda Murat

トルコ出身。トルコ科学技術研究機構 マルマラ研究センター 環境工学 主任研究官。2005年6月から約1年間、JICA研修員として集団研修「環境調和技術」のコースで、砒素汚染水の処理技術について仙台にて研修。

### 1) トルコから見た日本

日本に来て最も印象的だったのは、人々や町の穏やかさです。日本人は教養が高く勤勉で、手先が器用で、とてもシャイな印象があります。

トルコは日本に対して大変親近感を持った国でもあります。私たちの国では、8月になると、広島・長崎で起きた原爆についてマスメディアで取り上げられます。ヒロシマの原爆で被爆死した女の子が反戦・平和の署名を訴える、トルコの社会派詩人・ナジム・ヒクセッテ氏の書いた詩「死んだ女の子」は、トルコでとても有名な詩です。

### 2) JICAの研修コースを受けて自分自身が変わったこと・今後の抱負をお聞かせください。

精神面で自分自身がとても強くなりました。異文化を尊重し、受け入れることができ、異なる国の人々をより理解できるようになりました。また、砒素汚染水の問題は世界的に取り組んでいかなければいけない問題です。日本で学んだ処理技術を、今後役立てていきたいです。

### 3) 最後に、将来の夢は何ですか？

トルコに帰国してからは、仕事を続けながら、子供の権利など人に奉仕できるような活動をしていきたいですね。

世界の人が平和に暮らせる社会になるような取り組みをしていきたいです。

# INFORMATION

#### ・イベントレポート（2006.5）：宮城

七ヶ浜国際村インターナショナルデイズ 2006「モロッコ」

七ヶ浜町は、仙台市内から車で約40分、海に三方を囲まれた半島の町で、明治の頃から外国人避暑地が開かれる等、海外との縁もあります。現在は、町内の施設「七ヶ浜国際村」がその拠点となり、毎年「インターナショナルデイズ」と称して、世界の1カ国を取り上げて、食や音楽や舞踊などから、その国を紹介しています。

ゴールデンウィーク中にあたる5月3日～5日に開催された今回は北アフリカの国、「モロッコ」がテーマ。JICAも支援を行っている国であることから、東北支部から初めて参加して広報をさせていただきました。晴天に恵まれた3日間は、5000人以上を超える人でぎわいました。JICAのコーナーでは、「JICA事業紹介」「モロッコでの事業紹介」「協力隊モロッコOBOGによるモロッコ紹介・体験談コーナー」「子供向けのコーナー」を開催しました。

まずは、「モロッコってどこ？」 「JICAってなに？」という質問からでしたが、日ごろ国際協力にご関心のない方々に、JICAならではの視点でモロッコに迫ったコーナーに立ち寄っていただくことができました。来年はアルゼンチンを予定しているとのことで、JICA東北も協力していく予定です。 JICA宮城デスク：阿部純江



- ・4～6月にかけて東北各県でJICA関係の団体で、通常総会が開催されました。

団体名	開催日	場所・特記事項など
青森県青年海外協力協会	4月22日	弘前市・ロマントピアそうま ※新会長に高山幸人さん（ミカネシア派遣・日本語教師）が選任されました。
岩手県青年海外協力協会	6月 3日	花巻市・大沢温泉 ※新会長に平藤由美子さん（オランダ派遣・バスクットボーラー）が選任されました。
宮城青年海外協力協会	4月 1日	仙台市・市民活動サポートセンター ※新会長に菅原景一さん（タヒチニア派遣・理数科教師）が選任されました。
青年海外協力隊秋田県OB会	6月 3日	秋田市・ルポールみづほ
特定非営利活動法人 山形県青年海外協力協会	6月 3日	山形市・こまくさ荘
地球色の日焼け・あおもり応援団	5月16日	青森市・ウェディングプラザアラスカ ※新団長に奈良秀則さんが選任されました。また当日、元青年海外協力隊事務局長をつとめられたご経験のある、元ペルー・ケニア大使青木盛久氏の特別講演がありました。
宮城県青年海外協力隊を支援する会	6月 3日	仙台市・ハーネル仙台 ※「協力隊、地方の応援団への期待」と題して、青木盛久氏の講演がありました。
岩手県青年海外協力隊を育てる会	6月24日	盛岡市・エスパワール岩手
秋田県青年海外協力隊を支援する会	6月 3日	秋田市・ルポールみづほ
協力隊を支援するやまとたぐい家族の会	5月20日	鶴岡市・中央公民館
帰国専門家秋田県連絡会	6月 3日	秋田市・ルポールみづほ

#### ・山形・協力隊OB会が山形県に提言書提出！

政府が自治体に対し、協力隊経験者などを優先的に採用する枠を求める通達を出しており、既に京都市、富山県、長野県では制度化されていますが、山形県青年海外協力協会は、県に対し、以下の点を提言書にまとめて、提出されました。吉報が待たれるところです。

- 1) 県の教員採用に国際貢献特別枠を設けること
  - 2) 県の現職教員数名を毎年協力隊に参加させる環境を整えること
  - 3) NPO支援センターの安定的存続・維持させる環境を整えること

・JICA仙台デスク 新国際協力推進員 内藤直子 2006年5月着任

JICA仙台デスクとして仙台国際センターに常駐しています。

『一国際協力を仙台の文化に』するための一石となれるよう活動していくたいと思います。どうぞよろしくお願いします！

JICA 仙台デスク（仙台国際センター内）  
TEL : 022-265-2449 FAX 022-265-2485  
Email : jicadpd-desk-sendaishi@jica.go.jp



・JICA プラザとうほく HP

JICA 東北では、新たに東北オリジナルの HP を開設しました。東北出身のボランティアの方の現地からの便りをはじめ、様々な情報を掲載しています。是非ご覧ください。

**URL : <http://www.jica-tohoku.jp/> (PC)**  
**<http://www.jica-tohoku.jp/i/>**  
(ケータイサイト)



編集後記

A horizontal row of 40 empty circles, arranged in a single line.

ホームページ <http://www.jica.go.jp/worldmap/tohoku.html> Eメール [jicathic@jica.go.jp](mailto:jicathic@jica.go.jp)

# 独立行政法人 国際協力機構 東北支部

元980-0811

仙台市青葉区一番町4丁目6番1号

仙台第一生命タワービル 15 階

TEL 022-223-5151